

衝突の際、ヘルメットには衝撃エネルギーが発生するので、頭を護るためには、そのエネルギーを適切に処理しなければなりません。

一般的に、その主役は『**衝撃の吸収**』と捉えられていますが、いかなるヘルメットにも、衝撃吸収の能力には限界があります。多くの方は気づいていないかもしれませんが、大きな事故で頭が護られた事例では、衝撃吸収の以前に、ヘルメットには吸収とは違う、もう一つ

の大切なエネルギーの処理が働いています。それが、『**かわす処理**』です。厳しい現実の事例でも、『**かわす性能**』と『**衝撃吸収性能**』の二つ

が働けば、頭を護れる確率は高まります。それは、いかなるヘルメットにも当てはまることです。だからこそ、ヘルメットの中にエネルギーを向かわせずにすませる『**かわす性能**』が重要なのです。

その大切なかわす性能は、数値には置き換えられず、規格にも規定されていないので、あらゆる可能性を通し、手探りで、やらないより、やった方がよい改良を、積み重ねていくしかないのです。

という事を前回のアライニュースでお話しました。今回は、現実には何を進化させてきたのか、お話しします。まずは、フォームについて。

『**かわす性能**』頭を護るための取り組み②

## 『かわす性能』を活かすフォーム！

転倒例を検証すると、衝撃の痕跡は、滑らかな面を継続して残っている方が、ヘルメットが動き続けている。すなわち、かわす性能を発揮し続けていると予測されます。だから、アライのフォームは、あくまで丸く滑らかです。昔からの変わらないフォームにも見られますが、衝撃を丸い面で受け止める方が、より衝撃を緩和できると考え、フルフェイス登場時の砲弾型から、丸い面の連続が繋がる、卵型へと進化しています。

またシェル下部にある立体的なリブは、衝撃を受けた際、クラックがシェルを突き抜ける形でなく、リブで止めることを目的に設けられています。アライのフォームは、全ての要素が機能に結びつけられているのです。

ほんの一部の紹介ですが、アライのフォームのこだわりをおわかりいただけたでしょうか？

次回もまた、アライの頭を護る性能向上のための取り組みをご紹介します。



「かわす」ために  
スベスベが大切  
なんです！

